



Title	暴走する「国体」と生き残った文化システム
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2001, 2000, p. 15-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77293
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

暴走する「国体」と生き残った文化システム

伊 勢 芳 夫

1. 閉じられた世界から、世界の周辺へ

日本の歴史において、転換点は幾度か訪れたのであるが、江戸時代末期における歴史的転換ほど重要なものはなかったであろう。その時、日本の主権が脅かされたのであった。¹それ以前においては、主権が問題にされることはなかったのである。たとえば、鎌倉時代への移行に際しても、政権のあり方が変わっただけであり、日本人の生き方、その根底にある価値観が、根本的に変化したわけではなかった。つまり、政治権力の階層間・地域間における移行と、それに伴う租税等の政治体制の形式的変化であって、文化総体の質的変容ではなかった。もちろん、漸進的な文化変質は歴史を通して現れないというのではない。六世紀における仏教の導入もその大きな現れであろう。しかしその場合でも、仏教の導入の仕方を決定したのは日本人である。実際、当時の支配者は見事に仏教を体制維持の道具として利用したのであった。したがって、しばしばキリスト教やイスラム教が自然発生的な地域共同体の枠組を壊してより大きな宗教共同体へと統合していく原動力となったのとは違って、日本仏教は国家の枠組を弱めることにはならなかったし、鑑真の場合のような一部の例外を除いて、国家間の人的・文化的交流を促進することもほとんどなかった。儒教においても同様である。しかしそれに対して、幕末においては、それまで自明のものであった「主権」そのものが、脅威にさらされたのである。それは観念的な次元ではなく、きわめて具体的な形で現れたのであった。中国がイギリスとのアヘン戦争で屈辱的な敗退を喫したことであった。このような自明であると信じてきたものが自明でなくなる危機に際して、日本人はいやがうえにも国の形、つまり国家形態「国体」²について考えざるを得なくなったのである。

¹本論で「主権」という概念を使う場合、言語、宗教、価値体系、放棄を含めた軍事力等の共同体の文化システム総体を独立して管轄しうる状態をいう。

²「国体」は英語の“national polity”にあたるものであろうが、日本の歴史コンテキストにおいては、たとえば上杉慎吉が「何となれば帝国の国体を解して天皇主権者たりと為す所」というような意味が付与されていることはいうまでもないことであろう。もっとも上杉に天皇機関説を批判された美濃部達吉は、天皇主権を当然のこととしながらも、「国家を以て一の団体であるとし、法律上の人格を有するものであるとし、此の団体的人格者たる国家が最高統治権を保有するものである」という国家法人説を主張した。この考え方は美濃部によると憲法学者の中では主流であったようであるが、昭和十年（1935）に天皇機関説事件において美濃部が貴族院議員を辞任した後は、天皇機関説は反国体思想という烙印を押された。上杉・美濃部論争は、1912年雑誌『太陽』で行われたのであるが、上記の引用は、今井清一編、『近代日本思想体系 33 大正思想集Ⅰ』、(筑摩書房、1978)による。

日本は歴史的・地理的偶然によって、主権は自明のものであった。それは天皇主権が不動であったということではなく、主権と文化が乖離していなかったということである。したがって、天皇が存続しつづけたのは、いかに武士が政治的権力を掌握しても、天皇制を廃止する文化的基盤が日本に存在しなかったからである。そのことは、何も日本が単一文化・単一民族国家ということではない。それが神話であることは研究者の指摘するところであるが、³しかし日本の人種的・階層的マイノリティを武力を用いて抑圧し隠蔽する段階は、歴史のかなり早い時点で完了してしまった結果、日本のマイノリティは、隠蔽というよりも忘却されてしまったのである。したがって、文化や価値体系は自動化され、意識化されず、批判の対象にならなかったのである。このような文化システムは、長い歴史を通して異質な文化に干渉されなかった主権によって形成されたものであった。たとえば、すでに触れたように、仏教は日本の体制を補強する形で導入され、それと土着宗教である原始神道と結合されることにより、支配のイデオロギーを形成するにいたった。道教も儒教もしかりである。唯一、安土桃山時代のキリスト教は、それを覆す可能性があった。しかし当時は、文化的エントロピーが外的影響力をはるかに凌駕しており、日本国内におけるキリスト教を徹底的に排除してしまった、少なくとも隠蔽してしまったのである。しかしながら、宣教師およびキリシタン弾圧の御触書にみられるように、この時、文化的にも人種的にも日本人のアイデンティティが具体的に意識されたのである。すなわち、それだけキリスト教の脅威が支配者層の主権意識の琴線に触れたのであった。

もちろん、それ以外にも「日本」が意識されたことはあった。中国「漢」に対するものである。本居宣長の「大和心」、あるいは「和魂」もそのひとつであろう。しかしながら、それらは、少なくとも幕末以前は、一部の抽象的議論に過ぎなかった。特に江戸時代は、日本独自の文化意識・美的意識が形成され、歌舞伎や浮世絵においては、西欧はもちろん、中国にもない人物に対する美的基準が表現されている。そして、その美的意識はコーカソイド（白人）のそれとは異質なものであることは、安土桃山時代の南蛮屏風を見ても、幕末のペリーの画像を見ても明らかであろう。白人は美的範疇から排除されているのである。江戸時代においては、漂着した欧米人は見世物となり、好奇と恐怖心の対象であった。また、西欧文明に影響されていない日本を理想化したラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)は、白人の容貌を相対化して次のように述べている。

Was it not the eccentric Fourier who wrote about the horrible faces of “the *civilisés*”? Whoever it was, would have found seeming confirmation of his physiognomical theory could he have known the effect produced by the first sight of European faces in the most eastern East. What we are taught at home to consider handsome, interesting,

³ たとえば、Michael Weiner, ed. *Japan's Minorities—The Illusion of Homogeneity* (London: Routledge, 1997), あるいは、小熊英二、『単一民族神話の起源——<日本人>の自画像の系譜』、(新曜社、1995)を参照。

or characteristic in physiognomy does not produce the same impression in China or Japan. Shades of facial expression familiar to us as letters of our own alphabet are not perceived at all in Western features by these Orientals at first acquaintance. What they discern at once is the race-characteristic, not the individuality. The evolutionary meaning of the deep-set Western eye, protruding brow, accipitrine nose, ponderous jaw—symbols of aggressive force and habit—was revealed to the gentler race by the same sort of initiation through which a tame animal immediately comprehends the dangerous nature of the first predatory enemy which it sees. To Europeans the smooth-featured, slender, low-statured Japanese seemed like boys; and “boy” is the term by which the native attendant of a Yokohama merchant is still called. To Japanese the first red-haired, rowdy, drunken European sailors seemed fiends, *shojo*, demons of the sea; and by the Chinese the Occidentals are still called “foreign devils.” The great stature and massive strength and fierce gait of foreigners in Japan enhanced the strange impression created by their faces. Children cried for fear on seeing them pass through the streets. And in remoter districts, Japanese children are still apt to cry at the first sight of a European or American face.⁴

しかし、幕末にいたって「主権」は自明のものではなくなった。死守すべきものになったのである。外国の情報を独占していた幕府の老中安部正弘等には欧米との軍事力の差は明らかであったし、明治の藩閥政治を行うことになる薩長攘夷派たちも、薩英戦争や英仏米蘭の下関砲撃を通して身をもって知ることになるのである。このように、日本人は外国からの軍事的脅威を感じるようになったのであるが、これは単に軍事面に限定されることではなかった。もしそうならば、第一次世界大戦終了時には欧米諸国の中でも上位の軍事強国になっていた日本が、東条英樹の言った「清水の舞台から飛び降りる」決意をもって、無謀な日米戦争をする必要などなかったであろう。日本は、山本五十六の予想どおり、アメリカ相手に一二年暴れまわってから壊滅的な敗戦を迎えたのである。そのような戦争に駆り立てたのはいったい何であったのであろうか。少なくともその原因のひとつは、幕末に欧米列強によって、日本が閉ざされた世界から無理やり世界の周辺に位置させられたとき、日本人の意識上でコペルニクス的大転換が起こったことであった。そして、この時点から、主権と文化の乖離が始まったのである。

2. 脱亜入欧と教育勅語

日本は外国から顔のない国といわれる。カレル・ヴァン・ウォルフエレン(Karel van

⁴ Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, vol. 2 (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1922), pp. 157-8.

Wolferen)がその著書でいみじくも日本の国家形態を頂点の部分に欠けた円錐形をした”the system”⁵と言ったように、⁵欧米諸国のみならず、中国や他のアジア諸国とも異なって、日本においては、国家の政策決定をする人物や外交において全権を託された代表者を特定できないし、国家理念や歴史認識を明確に言語化する人物も見当たらない。決定や責任説明をする主体が、政治家集団であったり、官僚集団であったり、マスコミであったり、利益団体であったりする。しかも、外国人にとっては、彼らの説明には一貫性も整合性も感じられないのである。時の首相が過去の日本の侵略行為を謝罪した直後に、その閣僚がそれに相反する発言をして、辞任に追い込まれるということが一度ならずある。確かに、これは日本という国の本質的性格をあらわしているであろう。では、そのような国家形態が形成されたのは、何が作用し、何が作用しなかったのであろうか。

それはこれまで述べてきたことから明白であろう。外国に向けて国家国民を代表し、責任説明をするためには、自国を相対化し、分節・統合し、言語化しなければならない。しかし日本は、歴史的にそのような必要が生じなかった。回避することが可能であったばかりでなく、日本語という言語をそのような文化システムに適合する装置として作り上げたからである。中国語を読み替えることによって、中国の文化思想を中国語を習得することなしに、あるいは、中国語を習得した人物をリエゾンとして使うことなしに、摂取することを可能にしたのである。もちろんその過程で、日本の文化システムに合わないものは排除されるのである。つまり、日本の文化システムは孤立的生存に適し、国際的環境の中での生存には不向きなのである。それゆえに、相対化した国家意識がきわめて生まれにくい文化システムなのである。それに対して、集団間、個人間の分節化は複雑多岐に渡っている。通常個を区別する名前に加えて、個々人には社会的役割に言及する呼称が付与されている。それは「嫁」、「姑」といった呼び方だけではなく、「社長」や「女将」といった呼称によって、その個人の集団における位置関係を規定しているのである。そして日本の文化システムにおいては、個人をその個人名のみで言及することは、その個人の独立性を暗示するのではなく、独立した個として認知していないか、あるいは、集団からの排除を暗示するのである。したがって、「容疑者」や「被告」を個人名に付加することは、排除をある程度緩和する機能があるのに対して、アメリカのテレビニュースにおいて、しばしば被害者が個人名のみで呼ばれ、容疑者に”suspect”が付加されるのは、日本とは逆の文化装置が働いているからである。このように国家を相対化していない文化システムである日本では、その役割や責任はシステム内の関係における役割や責任であり、国家全体に対してや、外国に対してはまったく欠落しているのである。したがって、代議士が支持基盤の利益を優先し、彼らに責任説明をし、他方、国民全体、ましてや外国などは、代議士の意識の圏外にあるのである。そしてそれは、天皇統帥権下の日本軍の特性でもあったのである。

そのような文化システムは、主権が自明のものであることを前提にしているのである。日本の文化システムが相対化されない、ましてや主権が日本人の手から奪われないことを

⁵ Karel van Wolferen, *The Enigma of Japanese Power* (New York: Vintage Books, 1989)を参照。

前提にしているのである。しかしながら、幕末における開国は、日本の文化システムを防御する文化装置を機能不全に陥れた。人的交流や文化流入を排除できないどころか、制限すらできないのである。そして欧米列強から押し付けられた治外法権や、関税自主権の剥奪は、単に外国からの人的・文化的流入をコントロールできないばかりか、日本の劣位、周縁的立場を明示する烙印として、日本人の劣等意識の源泉となったのである。そこで政府は、一方では外国人居留地を作って、無制限の交流を禁じたのであるが、主権を回復するための政策を優先せざるを得なかった。したがって、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)が言うように民衆の間に西欧熱があったのと同様に、⁶あるいはそれ以上に、明治初期においては、多くはアップ・ダウン式に、帯刀禁止例から鹿鳴館まで、西欧的基準が広められたのであった。脱亜入欧である。しかし、それが反動的日本人から反発を受けただけでなく、日本に來た外国人の目にも好ましいものとは映らなかった。

欧米を模倣した「新しい日本」も「新しい日本人」も嫌って、出雲に「純粋な日本」を見出したハーンだけではなく、世界漫遊旅行の途上で二度日本に立ち寄ったラディヤード・キプリング(Rudyard Kipling)は、明治日本にハイブリッド性を見抜いて、皮肉をこめて当時の欧化しようとする日本を描写している。たとえば、最初の日本訪問は、折しも明治憲法発布に沸き立つ1889年のことであったが、キプリングは長崎の波止場で、鍍金の菊の飾りの付いた略帽を被り、まったく似合っていないドイツ風の制服を着た若い日本人の税関職員から、英語らしき言葉で話しかけられる。そして彼は、その税関職人を、”[H]e was a hybrid—partly French, partly German, and partly American—a tribute to civilization. All the Japanese officials from police upwards seem to be clad in Europe clothes, and never do those clothes fit.”と描写している。⁷もちろん彼は、ここで日本人の身体的特徴を笑っているのではなく、日本文化とは異質な西欧諸国の文化群を表層的で典型的な「西洋」としてとらえ、それを無邪気に模倣しようとする日本人の文化理解の浅薄さを笑っているのである。しかしながら、それは単に急激な欧化による通過的な、滑稽な猿真似にとどまるようなことはなかったのである。日本の伝統的な文化システムの崩壊を予期させるものであった。人類史上いまだかつて、地域的な文化システムの個人を規制する装置を破壊し、アナーキズムを実現した社会など存在していない。個人は、何らかの共同体から権利とともに役割と責任を課せられるのである。その共同体は、村落共同体の場合もあるだろうし、宗教共同体であるかもしれないし、封建社会かもしれないし、国民国家や共産主義社会であるかもしれない。日本の場合は、集団主義を根本原理とする共同体であった。日本の文化システムにおいて、個人は集団の中で強い規制を受けるのである。それが明治の初期のころ、楽天的な脱亜入欧的政策を実施することによって、文化システムを防御する文化装置を弱体化させてしまったのであった。

⁶ Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese* (1939 [6th edition], rpt. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1985) の”Fashionable Crazes”の項目を参照。

⁷ Rudyard Kipling, *From Sea to Sea, Part 1* (New York: Charles Scribner's Sons, 1906), pp. 350-1.

従来、明治憲法や教育勅語の発令の時期を、藩閥政府と自由民権運動という対立項で考察することが行われてきた。しかしながら、急激な欧化政策による弱体化の危機に瀕した文化システムが、その防護機能を働かせたと考えてみることはできないだろうか。たとえば、ハーンとチェンバレンの学校についての記述をみても、日本の文化システムの中心的文化装置である集団主義が機能しなくなっていることがわかる。それはイギリス人の目からみても、そのように映ったのである。たとえば、チェンバレンは次のように記述している。

As for the typical Japanese student, he belongs to that class of youth who are the schoolmaster's delight,—quiet, intelligent, deferential, studious almost to excess. His only marked fault is a tendency common to all subordinates in Japan,—a tendency to wish to steer the ship himself. “Please, Sir, we don't want to read American history any more. We want to read how balloons are made.” Such is a specimen of the requests which every teacher in Japan must have had to listen to over and over again. Actual insubordination—unknown under the old regime—became very frequent, during the closing years of the nineteenth century, scarcely a trimester passing without the boys of some important school striking work on the plea of disapproval of their teachers' methods or management. Moreover, there sprang up a class of rowdy youths, called *soshi* in Japanese,—juvenile agitators who, taking all politics to be their province, used to obtrude their views and their presence on ministers of state, and to waylay—bludgeon and knife in hand—those whose opinions on matters of public interest happened to differ from their own. These unhealthy symptoms, like others incidental to the childhood of the New Japan, seem now to have passed away without leaving any permanent ill effects, though to be sure, the latest investigators have been struck with the attraction exercised on Japanese students by all strange and extreme notions.⁸

明治初期の自由旺盛な学生に対するチェンバレンの記述には否定的な響きを感じられるが、それは何も彼が日本の伝統的文化システムを支持していたということではなく、一つの社会の文化システムが機能不全に陥っていることを彼は見抜いていたのであった。それが証拠に、引用の最後で、二十世紀に入って日本社会は一見平穏を取り戻したかのように見えるが、若者たちがこれまでにない極端な考えに惹かれ始めているという調査を報告している。はっきりとは書かれていないが、彼が何かを危惧していたことは確かである。はたしてチェンバレンはその後の日本を予感していたのだろうか。

⁸ Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese* (1939 [6th edition], rpt. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1985), pp. 151-2.

3. 天皇主権と「日本文化システム」主権

江戸時代の幕藩体制は、まさに日本の集団主義原理の成熟した発露であった。江戸時代において、日本の主権、文化システムは揺るぎのないものとなっていた。したがって、強力な軍隊によって支えられた中央集権的国家を作る必要はなかったのである。日本人のほとんどすべてが何らかの集団に取り込まれて、規制されるとともに地位の保全を保証されていたのである。天皇はもちろん将軍すらその文化システムに取り込まれていて、権力の私物化はできなかったのである。しかしそれが、排除できない外圧によって主権・文化システムが自明でなくなったとき、幕藩体制を維持することが不可能になり、文化システムの完成以前の王制を復古することになったのである。つまり、主権を防御するために天皇制という文化装置が必要となったのである。もっとも、これは文字どおりの絶対君主制ということではなく、あくまでも文化システムを死守するための一つの文化装置に過ぎなかった。しかしながら、日本が実際に世界という社会に投げ出されてみると、明治の最初の二十年ぐらいまでに、日本の伝統的な文化システムは弱体化してきたことは多くの日本人にとって明瞭になってきたのであった。それは思想的に国粹主義を生むことになる一方、支配層のほうでも文化システムを防御するために、天皇制という文化装置をより強力にすることを迫られたのである。それが教育勅語であり、明治憲法であった。しかしながら、その装置そのものは欧米、特にドイツの憲法の猿真似であり、日本の文化システム全体を刷新するものではなかったのである。結局それは、従来の脱亜入欧政策のパターンを乗り越えたものではなく、伝統的文化システムを温存するための付け焼刃的文化装置に過ぎなかった。したがって、世界はもちろん、国家にも、天皇自体にも責任を持たない暴走する「国体」が登場したのである。しかもその「国体」は、強大な軍事力を備えていたのであった。

そもそも天皇というのは、政治的実権を失った段階で日本の文化システムの中核に組み入れられることによって、侵すべからざる存在になったのである。そのようなメカニズムにおいて、天皇制を否定することは、日本の文化システムから排除されることを意味する。いわば破門である。もっとも江戸時代までは、キリシタンを例外とすれば、それにとって変わるべき文化システムを知らされていないために、人々は否定のしようがなかったし、強制もされなかったのである。したがって、その意味において、国家法人説の一種である美濃部達吉の天皇機関説は当時の状況にあっても実態に適合していたものであろう。日本の文化システムの中心にあって、その永続性を保証する機能である天皇制は、まさに日本の中核的機関であったはずである。しかしながら、神権天皇主義者たちに天皇機関説は排斥されることによって、国家の法人的性格が日本人の意識から隠蔽されてしまったのである。つまり、天皇という文化装置は世界システムの中で日本の主権を防御するために強化された歴史的事実であることが隠蔽されてしまったのである。そのことによって、戦前においては、「日本」の相対化の機運の芽が摘み取られてしまったのであった。

このように、日本が生き残るために復活された天皇制は、徳川時代まで自明であった伝統的文化システムの中核に組み込まれた文化装置としての天皇制から、何ら変化させられることなく単に強化されただけであったので、「万世一系」も「皇祖皇宗」も他の文化的コンテクストの中ではほとんど機能しなかったのである。そしてそれを機能させる最終的手段として、強引に日本の文化システムを世界に向かって投射しようとしたのであった。単一的文化システムに固執した日本は、世界システムに対して正しく機能する防御装置をもてないまま、戦略的に無謀な戦争へと止めどもなく邁進していったのである。

明治憲法で明記された天皇主権であったが、実際は「日本」主権、「日本文化システム」主権であった。つまり、非戦的であったといわれている明治、大正、昭和天皇の親政という意味での天皇主権など存在せず、また軍部を含めたいかなる特定の集団も主権を篡奪できず、もちろん国民主権などではなく、本当のところは、伝統的文化システムが盲目的に増殖を繰り返したのである。そして、伝統的文化システムが自己防衛のために作り上げた文化装置が、日本の暴走の制止を不能にしたのである。

江戸時代、徳川幕府は外の世界を隠蔽することによって伝統的文化システムを維持した。明治政府は、表層的な脱亜入欧政策によって、伝統的文化システムを温存しようとした。そして、第二次世界大戦後は、日本は明治時代に作り上げた文化装置を否定することで、伝統的文化システムを生き残らせた。そしてこのように国家を相対化できないまま、集団主義は生き残ったのである。その結果、今日の日本は、政治、行政、金融、司法、教育といった多くの面で、機能不全に陥っているのである。